

山縣有朋

憲

14

山縣有朋南係文書

乃父山縣有朋

山縣元帥 德富蘇峰稿

◇ 箸

の 上 け あり し じ ち 盡 忠 報 國

ま せ じ

こ の 父 母 を あり の ち じ ち 心 事 あり し

し ま ち け 小 と も ； ； ； 口 家 庭 の 人 と し

た ち 私 の 申 上 け じ ち ち 如何 の と は 存

亡 父 山 縣 有 朋 の 逸 話 の 一 ち こ と を 子

男 爵 夫人 船 越 松 子 氏 談

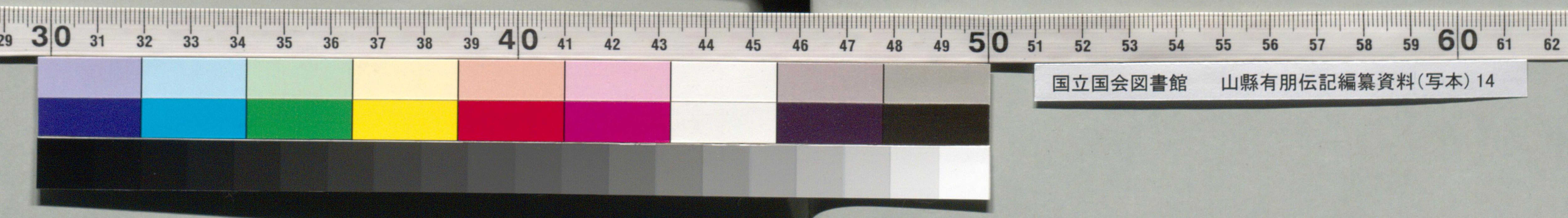
乃 父 山 縣 有 朋

Handwritten text in a grid format, likely a transcription of the adjacent page. The text is written in cursive and includes names and titles such as '山縣有朋' and '船越松子'.



父	の	一	面	は	世	間	に	守	て	居	り	ま	す	思	い	。
武	士	気	質	の	誠	に	嚴	格	を	人	で	い	さ	す	一	れ
。	自	身	の	日	常	生	活	に	い	ち	ま	す	。	凡		
ゆ	ゝ	物	事	に	対	し	ま	す	。	規	律	正	し	い	の	
が	好	き	で	。	如	何	な	か	の	細	事	毎	日	。	好	い
加	減	に	し	て	置	く	と	か	た	げ	や	り	る	と	か	
と	此	帝	に	嫌	む	ま	す	。	隨	て	趣	味	に	い	ち	
ま	す	。	庭	園	造	り	。	和	歌	。	た	げ	先	天	的	

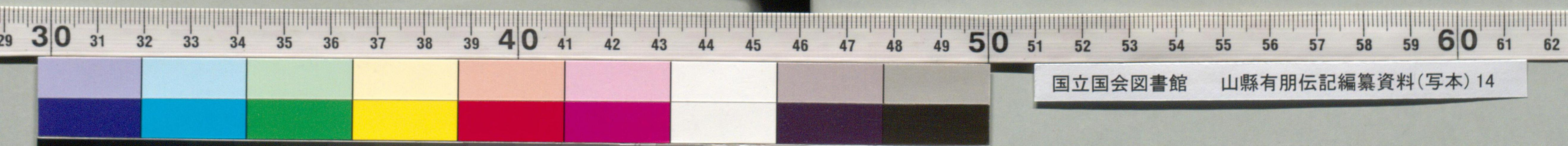
心	の	深	か	う	た	と	い	ま	一	例	は	。	先	帝	山	仰	の
規	律	正	し	か	う	た	こ	う	。	皇	家	を	念	に	奉	る	
の	市	と	根	強	く	考	へ	て	の	上	で	な	つ	た	や	う	で
も	娯	樂	の	意	味	か	う	ば	り	。	て	あ	く	俸	育	と	亡
仕	舞	。	た	げ	。	く	で	居	り	ま	す	。	た	が	。	之	心
の	か	と	も	存	せ	う	ま	す	。	外	に	。	詠	曲	。	。	。
で	い	ま	せ	う	ア	レ	ま	す	。	に	や	り	ま	す	。	し	た



折。此れ多くも昭憲皇太后陛下から賜は
 り。又、此れ御遺品の御剣と神俵として。邸
 内に明治神宮を斎り奉つて居り。又、此れが
 如何なるにても毎朝飲かさず朝がよめ
 して御拝まつたし。いよく容体の要く
 な。まじき遠へみせん。のびし。誠心回家
 観念の強固な人で。家庭内にありて
 も下世話に申す可筈のありおし。此の間

3

も皇室と。國家の事を忘れたるで
 。私の子供が美り。あつても。折にみ
 時に存して。たしを申し。あかせ訓戒いた
 り。さうび。このさい。あす
 〇あか。あさ。あま。あそ。あそ
 斯う。し。た。厳格。あ。不忠。な。こと。や。不正。な。こ
 と。は。寸。令。も。任。借。し。た。い。人。で。い。が。つ。あ
 たら。が。一。面。に。あ。父。と。して。又。た。社。又。り。て



将た一家の主として
 亡くす。其の遺族は
 経済と財政と。其の
 方は士友学校、生徒
 への勤めとありあんの
 計。其の方は士友学校、
 生徒への勤めとありあ
 んの計。其の方は士友
 学校、生徒への勤めと
 ありあんの計。其の方
 は士友学校、生徒への
 勤めとありあんの計。

夫が外にまゐつて居り
 ます。其の間、其の
 勤めとありあんの計。

山縣公史實調査會用紙



着獲もすかば。召使ひのたかか向方
 の言おもも出りの着獲の出采たのを正す
 と。何時つらもに足らぬやうな言を申
 したと云ふことも少す。又夫は父
 のたかたけり前の年の五月から既末に漫遊
 いたり。其年の十一月の末に帰
 朝。い。た。り。あ。り。た。り。丁。夜。甚。垣。私。は。小。田。原。へ
 参つて父の着獲をワケして居り。たか
 が

父は正夫に對する妻の希仕を急つては
 たらぬ。備も急に何と云ふやうなこ
 と。あ。り。あ。い。に。吐。健。に。た。ら。た。ら。光。之。丞。に。逢
 ぬ。行。か。う。兔も角く早く歸つて。役
 小。う。心。と。待。受。け。る。準。備。を。す。る。か。好。い。帰。
 へ。心。と。申。し。て。き。く。あ。せ。ん。斯。ふ。云
 ら。風。に。海。中。で。も。畑。か。あ。所。之。氣。の。つ。く。人。で
 平生か。う。鍬。り。夫。た。方。で。た。り。私。の。身。作



ち
 へり
 半
 办
 こ
 書
 も
 上
 二
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十

張子の玩具を持来つた
 ち
 へり
 半
 办
 こ
 書
 も
 上
 二
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十



新採に心かゝるの品物の贈物も歓迎せられた
 が、新知識の贈物は一入歓迎した
 て、子供か老りおこも学校のこし、先
 生の事柄と何くもとなく尋ね、夫が^{おつし}渾
 行かゝ帰りおすのを待ちこがれ、^マ老之
 五か帰水は^バ現米の新らしい事情か少^マけら
 喜足もおこし、日本の為めに到新も

しやう、早く帰水は好いに、と申し
 て、他之す新知識を吸収しやうと婦めて
 居たやうで、いさいます
 今一つ、父は質素で、贅澤と去ふことも
 非常な嫌つて居りおられた。父の婦めて居
 りおられた身古帯は七くなりおられた母の衣
 類も直したもろびござらました。座布團
 たいもよく母のお古衣^{ふる}びつくりせと居り



ました、
もろして
父は常に
物を粗末に

すすのは
國家の
ために
損失を
申し

この
何品に
よす
大切に
いたす
。慶
初利

用を
躬かみら
実行
して
言はず
語らず
のろ

ら
近
親の
ものを
奪つて
くわ
て
居
た
の

ひ
ご
ご
い
あ
す

21

大正十一年二月三日
同民科
中
定
載

山縣之帥

山縣
生

山縣元帥

蘇峰生

◇予の後は洪水

朕が後には洪水ありんとは。路易十四世

垂苑の語と傳ふ。山縣元帥は。如何なる

末期の句を吐きたるか。知らざるや。若

し其の心事を忖度すれば。恐らくは予の

死後には。洪水ありんとは。方ふたひあり



◇公生涯の創始

従ふ公的生涯は、實に安政四丁巳の歲、

五人の青年と與に藩命を帯びて京都

に時節祝祭に罷遣せられたるに始り、其

の一人は、實に彼が後年の對手たる伊藤

博文の如うたるに、彼は二十歳、山縣小

輔と稱し、伊藤は十七歳、伊藤利輔と

稱し、彼は天保九年秋に生じ、家門は

旧なりと稱すも、當時は全く卒位であ

つた。

◇松陰門下

當時萩藩の青年は、直接、間接に、吉田

松陰の感化を被らぬものは無つた。彼は

當初より他の離下に立つて欲せず、寧ろ

独り此術を修め、松陰の門に遊ぶを序

とす。然るに、京都に於て、久改玄



瑞に勅授せうん其の紹如状と持て

归来逆心に其の門に學んたれ但た恐らく

は安政五年戊午の一月四年に過すはあつた

正のらう均しく松陰門下と稱すも

高松久改心又た呂川野村の題とは

聊か其の款を珠にてある

◇山縣狂輔

儀の維新以前に於ける閱歴は、享年奇兵

隊の軍監山縣狂輔とて世に傳つてお

る。奇兵隊とて維新回天史上に

々の支えらめたるのは、固く高松晋作

の天尤に帰せぬはなまの、高松は突に

當化の時代勢カか産つた奇男児た。役は天

外より湧き来り奇想をば、神変不可思議

の手腕もて之を運用した。後年山縣か

位人厚と極め、功勳坤熒と昭る大の時

高松の本領であつた。その首尾
 昭々たる。統制あり、節度あり、
 水も渾水が、けが功を万全に謀り、
 完成に期するは、一に彼の努力に
 せざるを得たか、た。役に、高松と
 度たの末期に死せし乎、尚ほ其の
 以後世に傳ふべきものがある。然も
 事業は、寧ろけがらひあつた。

◇當初より政治家

既に政治家の素質があ
 役は、時に於て、既に政治家の素
 つた。彼は薩長聯合が、討幕に
 條件のあるを感得した。而して自
 ち挺して、其の使命を果す可く、
 今年五月、薩藩の伊集院全次郎、
 半次郎、桐野利秋と共々京都に
 藩邸に上つた。薩長の聯合は、半
 次郎が

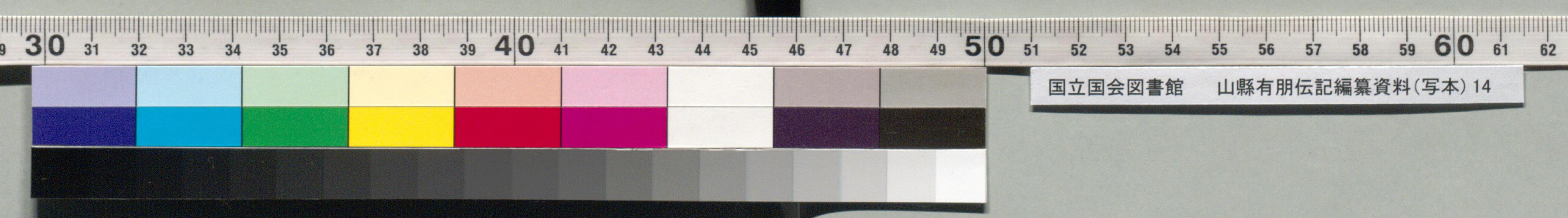


山縣有朋傳記編纂資料(写本) 14

公	生	涯	と	一	貫	す	る	信	條	の	一	と	な	つ	た	。	而	
し	て	其	の	薩	の	と	の	職	合	に	就	て	は	。	彼	は	走	つ
其	の	巨	漢	たる	西	郷	南	洲	と	握	手	し	た					
薩	長	の	職	合	は	。	け	す	し	も	專	ら	け	に	起	因	す	
と	さ	ふ	可	き	び	た	い	。	然	も	彼	の	け	行	加	。	之	
と	實	現	す	る	上	に	就	て	。	促	進	の	効	能	多	か	つ	
た	こ	と	は	。	固	く	疑	を	容	れ	ぬ							
若	し	た	ら	ば	辰	の	役	に	就	て	。	彼	が	此	職	に	轉	

戦	し	。	其	の	切	勳	の	少	か	う	さ	り	し	こ	と	は	。
く	。	明	治	二	年	命	と	考	し	て	。	政	治	を	祝	祭	し
た	。	け	水	が	役	の	最	初	の	海	行	た	。	役	が	け	行
に	就	て	如	何	な	る	所	得	あ	つ	た	か	は	。	役	が	熱
心	な	る	薩	藩	置	縣	若	と	なり	。	又	た	熱	心	な	る	。
兵	権	統	一	若	と	な	り	た	こ	と	い	分	明	た			
◇	大	村	と	山	縣												

山縣有朋傳記編纂資料(写本) 14



當時長藩に於て。軍事的總裁と云ふ可也

は。山縣に於て。大村に於て。大村は

高松と異りたる意味に於ての。論略家にて

あつた。成程の職役に於て。之れ従事し

たる兵教よりすべし。薩摩に於て。か

其の統制権は。西郷にありし。却て

大村にありた。大村は日本に於ける軍制

の創立者なり。記略者一人に。但

た。彼は薩人と其に。之を突行すより也

。寧ろ薩人に對して。之を突行せんとす

。傾向ありた。大村は略すは天下の

亂の。再心薩南より出来たり。隙駈し

て。あつた。その理由よりして。大坂を陸

軍の根據地とす。然るに。彼は刺客の手

に。弊あり。而して其の位置は。幾も行く山

縣の紹介所なり。た

◇陸軍に於ける山縣

然し山縣は決して大村の跡襲者ではな

つた。大村の衣鉢は寧ろ山田野矢に傳へ

た。山田は山縣に比すれば、實に於て

奇抜の天才であつた。彼は智慧の塊と

稱せられ、又其小卒初と俚評せられた。

さうは陸軍に於ても、大村の系統に属す

るものゝと、山縣は獨り者として、自ら

派をなす。而して別に雄大な薩摩の

勢力が、虎踞龍蟠してゐる。古くは

一、叶問に於ける山縣の苦心は、果

幾許のあつたらう。従は其の脚下に長

州人士は、たゞ有力な山田の如き、又

對者として、古くは、競争者を有して

、而して大村の薫陶に浴したる陸軍の

智識は、概して山縣に託せられて、寧

と巧くた。蓋し天下に協師多きも。西郷

経道は。天下一品であつた。

◇帝國軍制の完成

他の點に於ては。いさ知らず。けの薩長麻

合の力を核心として。軍制を完成した。

は。全く彼の方に歸せ。收はなる。あつた。而

して一切の障礙を撤し。徴兵令を布

全國皆兵の基礎を定めた。は。はすも

山縣一人の力のみに。た。た。た。若

し其の殊勲者。一人に求め。固よ

り山縣を除いて。他に其人は。ない。但か

帝國軍制を創制する。先づ西周を

善魯西軍制を執沢せし。自から之を

十二方。咀嚼。諒合し。而して後之を

議した。と。た。彼か。一事を。成す。其

の豫備知識を用意し。自から不敗の地を

占めて。而して後之を行ふもの。以て
 了べし。而して後之を行ふもの。以て
 方鎮台の設置等。著々實踐したる効果は
 明治十年の役より始りて其の實物
 教訓を天下に示した
 〇十年の役
 西南の役は、役に取つては、寧ろ仕合ひ
 であつた。其の友人にして先輩たる西郷南

洲を失うた。微兵令の普及を妨害す
 了。障礙は。或るかの爲めに強くと全く除却
 せられた。薩人の陸軍に於ける協力は。
 半減せられた。吾も三分の二減せられた
 一戦後。天下復た帝國の陸軍に向
 へ。山縣に向へ。指と花木ののちで至
 った。國より亦後若干の異分子を生せぬ
 であつた。然も三浦、島尻の如きは



仲間中の不平見であつた。岩、曾我。
 小沢等の如きは。極めて少敷者たる異方
 子中の不平見であつた。固より山縣に向
 て。業の立つ可き心配はつた。
 最早事實は陸軍の山縣と云はしより。
 山縣の陸軍となつた。とは山縣が西御
 大山と控擧し。西御が海軍に掛つた後

は。専ら大山を名譽の地位に立て。自か
 う実権者として。其の元締をなす。たか
 たら。而して彼の如き勢力を得たるは
 決して僥倖でもなく。偶為でもなつ
 たら。彼としては正さる所なく。留
 結の収獲であつた。若し山縣をして。
 隆に遊ばし。むるも。彼が帝國陸軍の完成
 者であらうと云ふ名譽は。百代に傳ふ可



山縣有朋傳記編纂資料(写本) 14

き
ひ
あ
つ
た

◇政治家生涯の創始

あ
し
役
の
政
治
家
生
涯
の
創
始
。 學
び
明
治
十
年
役

以
後
の
政
治
家
生
涯
の
創
始
。 始
つ
た
と
言
は
れ
ら
ぬ
。

役
の
政
治
家
生
涯
の
創
始
。 本
來
の
政
夫
で
は
な
か
ら

つ
た
。 如
何
に
役
の
政
治
家
生
涯
の
創
始
の
心
に
。 鏡
人

で
い
た
か
は
。 一
片
の
日
葉
樞
日
記
に
。 七
七
説

し
て
録
し
た
。 以
て
は
役
の
三
十
歳
の
頃
。

薩
の
政
治
家
生
涯
の
創
始
。 京
都
潜
行
中
の
作
り
た
。

が
。 其
の
中
に
詩
あり
。 和
歌
あり
。 著
素

人
語
の
。 記
述
あり
。

然
し
役
の
政
治
家
生
涯
の
創
始
の
心
に
。

。 役
の
政
治
家
生
涯
の
創
始
の
心
に
。

周
の
運
用
術
に
長
て
い
た
。 役
は
陸
軍
出
身

ひ
い
た
が
。 其
の
素
質
は
。 寧
ろ
政
治
家
で

あ
る
。 但
し
軍
事
の
修
練
と
は
。 役
を

山縣有朋傳記編纂資料(写本) 14

は、姑く其の大なるものを存すは、
 彼の地方自治制を施した事にて
 地方自治制の具人
 今既に施す。此の地方自治制後の不都合
 不適宜を設く者か少くはない。然も免も
 向も、帝國議會開設以前、帝國憲法公布
 以前、市町村の自治制を制定し、之を實
 行するを得せしめたるは、彼の如き

有力者にあらずして、到底疑を排して
 之を行ふを得ぬ
 ◇彼の独逸化
 彼が曩に普魯西の徴兵法を、我に適用
 した如く、又其自かゝる地方制度、編纂委員
 長とたり。独逸人モツセを、起草の
 任に當らしめ、惟ふに、彼は或は普魯西
 中學の政治家、
 斯丁スタイルに私淑あり所ありたり



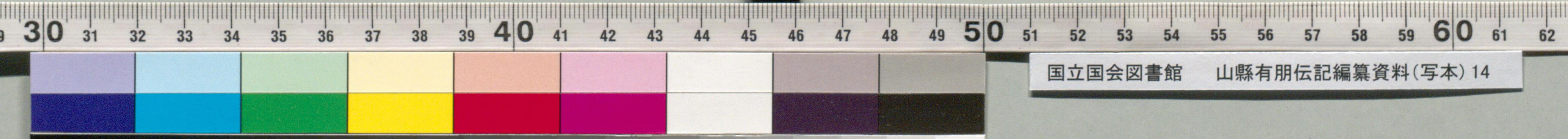
乎。彼以外國語の知識がなつた。然し
 彼の歌胆は。或る程度迄独逸化した
 彼の近世の独逸に於て。強人の其の理想
 的標本を足出た。考し彼の軍服を
 著せし。軍刀を帯^さはす。彼は丸
 腰のザリ^しも。優^れて一流の政治家と
 して。十二分に伊藤と抗衡するの地位を占
 めた。此の如く。然し彼の軍服と軍刀とに

身を委ね。容易に純粹の政治家たるを肩
 とせし。この月五つに
 ◇第一議会の於ける首相
 然し暗喩は奇なり。運命を齎す。帝國
 未曾有の第一次帝國議會は。憲法の重ん
 じ起草者。伊藤に於て。開会せし。不
 便に於て。開会せし。明治十四年十
 月。大隈を政府より追出し。左二十一年



此に就ていふも、其の是くは就て、尤も
 其の用意の周到を甚く堪へた。別言すれば、
 彼の政治的本能は、其の是く一歩の隙に就
 て、いふべく、いふ善く、いふ巧みに現呈
 せしむれば、如何なる場合にも、彼は刀
 折れ、去盡せしむる迄、戦ふ如きは、已苦
 ず討死の慮さすたかた。彼は勝算ありさ
 ず、必死の志あり。而して高は戦ふの餘力を刺

きて、是く、是れ山縣一流の家
 たる。彼の流儀は、彼の対象たる伊藤に就向
 して、殊に苦手であつた。
 ◇二十七八年戦役
 二十七八年戦役は、いふは、彼の一人の力
 とあり、可きなり。軍事上は、就て川上操
 あり、外交上は、就て陸奥宗玄あり、而
 して當時内閣の首班たる伊藤のありあり。



の他大山、西郷の徒、皆取らる。然も彼も亦
 の分け前に預うぬはなうぬ。然も彼も亦
 此帯した。彼の牙一軍の司令官とす。其
 事華屍を裏あゝの覚悟を以てお掛けた。其
 の病の爲めに満洲より勅命もて召還せ
 られたる。當時已に連戦連勝の後にて
 出でて我軍に損たさ所はなかつた。

◇日露恨商

戦後我評もな。彼は明治二十九年三月
 命を帯して露國に赴き、二世の勲討ち
 赴つた。此小は軍に儀才一適の用務では
 巧み。當時三月干渉の終を承け、露
 國の極東に暖む脅威は、宜に異常におつ
 たら。其の手は朝鮮を抱き、正すに我の欲
 海に及ぼす。これにて、彼は露國と恨商す可
 く流をせう。これにて。



大正二と學のひやはやみまじ

國の老の身は捨つるも

是水災に彼の使節に討する決心を言明し

たもめた。斯くて六月露京に赴き

縣口バノ一ノ招商はあてまつた

◇吉馬燈の政局

彼は二次伊藤内閣の降には、元老の

の爲めに司法大臣とつた。然もやがて

其の次官芳川と大臣に推し、樞密院議長

とつた。二次伊藤内閣の後、松隈内

閣出で来り、即ち三次伊藤内閣出で

来り、政府對政費の軌轍は、愈よ其極に

達し、遂に未曾存の政党内閣と稱す

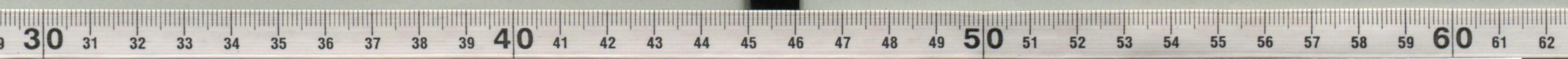
。隈板内閣は出で来つた。三次伊藤内

閣は、明治三十一年一月に成立し、六月

に例小。隈板内閣は七月に成立し、十一

山縣有朋伝記編纂資料(写本) 14

山縣有朋伝記編纂資料(写本) 14



山縣有朋傳記編纂資料(写本) 14

月 12 例 小 12 政局 可 怡 外 0 走 馬 燈 の 如 く

変 轉 し た

伊藤 山 縣 の 激 論

役 外 政 治 的 手 腕 は 專 断 的 の 際 に 甚 場 也

之 小 12 彼 以 伊 藤 三 次 伊 藤 内 閣 の 末 に 於 之

。 伊 藤 乃 自 己 の 政 党 と 結 ぶ 也 之 亦 有 之

及 対 し 御 前 合 議 に 於 之 大 激 論 と 伊 藤

と 交 換 し た 或 は 伊 藤 が 大 激 論 と 彼 以

仕 向 け 12 之 古 之 得 之 之 何 小 12 12

も 彼 以 政局 者 が 自 己 の 政 党 の 首 領 と 為

る 以 対 し 及 対 び 之 12 12 12 12 12 12 12 12

異 論 に 対 する 報 復 12 は 之 否 之 否 12 伊 藤

以 特 に 野 党 大 合 同 会 の 成 立 12 12 其 の

兩 首 領 大 隈 板 垣 と 後 継 者 に 奏 薦 し 之 去

つ 12 而 12 之 其 の 後 加 大 隈 党 板 垣 党

の 仲 間 宣 華 と 之 12 問 12 之 大 隈 板 垣 内 閣

山縣有朋傳記編纂資料(写本) 14

の崩壊した

◇第二次山縣内閣

の如くして第二次山縣内閣は明治三

十一年十一月に成立した。彼は現在の政

友会の前身自由党と提携した。彼の提携の

の為めに。彼は増程案を通過させた。然

る彼の提携の為めに。彼は肝膽相照らさ

ず。新語の下に。題する不慮なる代償を払う

た。然り固より彼は無代に。或初を獲

るを豫期した。たかうた。これは固より覚悟

の前をたつた。然も彼は麗く政治黨員

の慾望に堪得ず。寝耳に水の文官任用令

を發布した。而して第三十三議會。第十四

議會を切り抜けた。明治三十三年九月。其

議を去つた

◇不平の伊藤

山縣公史實訓查會月報

山縣公史實訓查會月報



は所い。彼は日英同盟の主唱者といはる。了道も。其の有力なる味方であつた。廟議加之に決つたのは桂、小村の努力は。勿論であるが。閣外の有力者として、彼の支持の功に歸せぬ。而して對露政策に執つても、彼は所謂硬派であつた。と乍時に決つて軟流でもなく、其の行く可き所に行くを豫想して、其の最後の

山縣有朋傳記編纂資料(写本) 14

決心を有するに違疑しなかつた。而して其の戦役中。老政治家としてのみならず、老軍人として、軍務に執掌したるは、良^きに多しとすべし。是も其の加ふる。彼の政治的生涯は、第二次山縣内閣を以て、表面上其の終りを告げたるが如くある。その事實は寧ろ其の拡大せらる

◇元老中の巨頭

山縣有朋傳記編纂資料(写本) 14



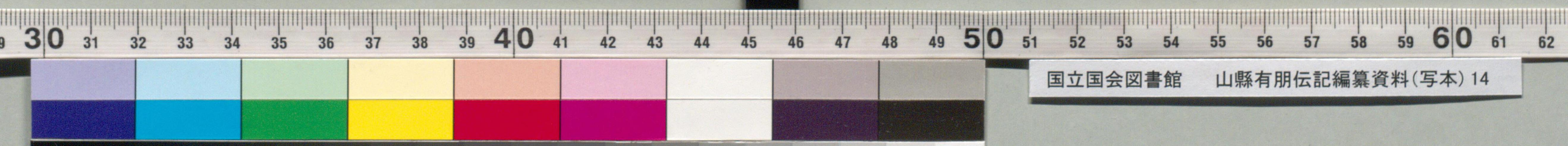
小 こと言ひ得らざりし。彼は元老中の巨頭
 とし、伊藤と対峙し。至尊の最高顧問
 問 たるは左時。大小文武群僚の景仰を
 一身に集め。真に此類の人物と云ふ
 也。而して明治四十二年十月、伊藤の病
 命の難に遭わば。余も彼は全く元老中
 の唯一人と云ふ。吾も殆んど唯一人と
 云ふ。然し彼は謙抑自ら
 威勢の府らたらず。然し彼は謙抑自ら

持し、之を大心する。其の實を
 其名を避けて。其の實を取つた
 伊藤對山縣

彼の政治的生涯を語りには。伊藤の
 對手たる伊藤に言及するに要あり。彼
 の短かき政治的生活の對象は。大隈
 及び伊藤に對して。彼は恐らくは伊
 藤を以て其の正面の相手と見做す。

う。伊藤其人也。左様であつたらう。彼は
 天保九年戊戌つちのえいぬの歳とし一八三八やへに生れた
 か。伊藤は左十二年辛丑かのうしの歳一八四一
 に出た。即ち彼は伊藤より三歳の
 兄であつた。彼等は少少の親友と云
 はす。相知りあつた。彼等は其の家
 格も均しく仲間であつた。而して其に
 安政四年、京都に時勢祀奉に特派せられた

た。六人の中の二人であつた。
 ◇何れが兄何れが弟
 慶応元年四月。高松が山縣に去つた書
 中の一節に曰く
 小生朋友中。聞多(井上馨)而已のみ是(伊藤)也
 且最知己の事は付。中津輔依波下候
 様。頼候。春輔(伊藤)博文(才子)也
 伊藤様無之様。是亦春頼候



斯る文句より乃小は、彼は年若くして
 凡てに於て伊藤の先輩たる可きであつた
 か。政治界に於ては、寧ろ伊藤の先輩と
 して、年長者たる役、又井上の上にて
 つた、と小には伊藤が本戸、大久保、岩
 倉等に比し、用せし小、軍用せし小、為の
 にもあう、伊藤の政治的生涯は、明治
 の初期から中期にかけて、実に旭日冲天

の物かあつた。伊藤は恒に帝國を背負ふ
 と、立つ大政治家を以て、自かゝ居つた。
 山縣は特に自かゝ諒りて、^{一りくた}一介の武勇と稱
 した、彼には稠人廣座の中に於て、伊
 藤と其の座位を争ふが如き、穉氣は無か
 つた。

◇ 楊山と不識庵

併し、あゝ伊藤の心中尤も畏れられたのは、



大隈の如く。山縣の如く。山縣は事毎
 に叶ふし。伊藤の如く。伊藤は山
 縣を以て。其の隱居たる。競争者たる。と自
 覚せずして。止む能はず。山縣は
 伊藤に對して。譲る可き心譲つたのみで
 なく。隱居を可成り隱居した。然も彼は
 決して一歩の如く。山縣は
 伊藤の如く。山縣は伊藤の如く。山縣は伊藤の如く。

伊藤との如く。伊藤は。恰も。機山と不議履の
 如く。山縣は伊藤の如く。山縣は伊藤の如く。山縣は伊藤の如く。

若し忌憚なく。二人の思惑を存分に語ら

◇ 西の思惑

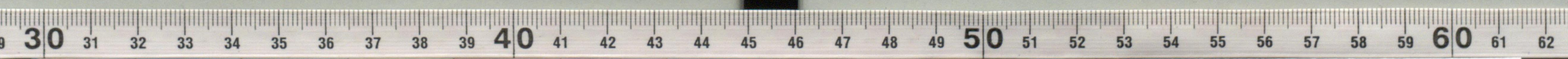


のば。山縣は言ふれぬ。伊藤は言
論の雄た。議論は甘々の実行は物に
らぬ。藩志弱行とは伊藤の謂ふに
藤は言ふれぬ。山縣は軍略と政
略に同ふ。安に油断のたぬ男に
エグイ奴はたつと。保しぬは二人の互
ににあら探しの言葉にあり。二人
忠の士。天下の大難。大事に降して、伊

山縣有朋伝記編纂資料(写本) 14

藤の第一の相談相手は、山縣にあり。山
縣の相談相手は、伊藤にあり。所謂天
下の英雄は、使君と操とのみとは、恐ら
くは明治二十年より、明治四十年に至る
二十年間に亘る、伊藤の關係にあり。宣
う。伊藤二人はあつた。宣
はしつゝ、利権離るゝ。か
あつた。

山縣有朋伝記編纂資料(写本) 14



◇看板と無看板

要するに伊藤は政治家を看板にした政

治家であつた。山縣は政治家を看板にせ

ず。政治家であつた。彼の軍服と軍刀

とは彼に似て一種の保護色であつ

た。従は到底政治家たるを免かた

かつた。山縣は恒に自かゝる赤電報の読め

ぬ者は首相たり難しと古うた。赤電報

とは赤字電報だ。伊藤は屢々其の得意の

外回仕入の新知識を以て山縣に對した

赤電報は伊藤の山縣に對する最上の

武器であつた。若くは武器の一であつた

。然も新知識に於ては山縣は恐らくは

伊藤の下には就かたつたであらう

◇官僚軍閥の大本尊

彼の知識は。其の食色より其の

山縣公史實訓在任月組

山縣公史實訓在任月組



つた。役以外同語を解せたりしも。其の
 自の、専門とす。軍事は勿論、あらゆる
 方面に向つて。知識を吸収す。餘力を刺
 さす。其の、役の、身は近年漸く活力を
 満ち、退し。其の精神は最後迄、弾力を
 失はなかつた。而して伊藤は、尙初官僚
 の中心人物とす。其の言動の
 漸く官僚の信望を繋ぐ能はしたる事あり。

伊藤の官界に開拓したる版図は、強く
 岩手、山梨の握中に在り。是れ山梨が
 伊藤の領土を侵蝕したるに反し、自然
 の趨勢は、至つた。其の、西人の晩年
 は、此の、軍人は固より、あらゆる官
 界に伊藤の記録せしむ。山梨の記録
 たる、其の如くして。山梨は、然る事
 あり。自から軍閥官僚の本尊となつた。



所謂の曰大御所の綽號は不倫なる
 者經の消息を語りて穿つ所ありと
 言はぬはたぬ
 〇超世獨特の位置
 伊藤の死後彼の位置は全く超世獨特
 のものとなつた。乃ち軍用を罵り官僚
 を嘲り天下の政變者流も表面は免れぬ
 もの。其の實際は相に競ふべし彼の一翫
 陰

と贏ち得るは是れ没せたる姿なり
 彼も實に一人なり。近世は強く
 此類は、權力の所有者であつた、而
 て彼が之を所有する長且つ久し
 然も能く其身を保つた所以は、彼が之
 濫用せざりしに歸せぬは、否、其の
 權力の所有者として、然も之を所有せ
 り、
 〇如く、所謂の錦衣を纏ふ尚一た



懐重。鎮案の注意に帰せぬは、彼

は貧しき者の如くして、貧しきものは

科と殊に、富とは財産ではない。政治

的権力の富は、

◇彼と政党政治

彼は近時のデモクラシーに就て、批評の

理解が、あつた。それは記者の知に限り、

なつた。然し彼は政党政治を以て、憲政の

可からざる害毒と見做す。害毒にあらず。故

に自から手と政堂に下さぬ。酔く可から

が。故に政堂撲滅の如き。莫迦う。以て

経歴。取らぬ。下は彼の政治の要諦は、

一の政堂を以て。他の政堂を制せぬ。

自から漢夫の利を占めんとす。これあつた

◇政堂に對する論文

故に彼の論文通りを去る。力盡方裂に

ありて、方党専制ではなかつた。彼の大隈を以て、政友会と区別せしめたのも、又これ政友会と一の大隈党と区別せしめたのも、彼は何等の思怨はなく、只これ其の理想を行はるる過を以て、從令其の年齢と、其の立場と、不相応な了新知識ありとす。彼は要するに此公流儀の政變操縦を以て、能事とす。此他

たうぬ操た。この一兵は就ても、彼の獨逸化して、適例と思ふ。◇山縣と政友。役加有かつ、千を政友に添ぬたかつた。此の軍職を帯びた。加藤のついでに、其の軍職を帯びた。さうして、彼は、政友以外に立つて、政友を操縦す。本意とす。操た、保し、ながさ、此



加	爲	の	に	は	。	其	の	親	近	者	と	し	て	。	若	干	の
党	員	と	。	統	率	せ	し	て	。	中	要	と	は	。	往	々	に
一	つ	感	の	一	れ	様	に	。	彼	は	政	党	を	改	め	て	。
壹	心	致	す	べ	し	。	其	の	能	事	と	し	て	。	然	。	然
も	句	か	ら	立	て	。	試	み	。	其	の	容	易	な	。	。	。
ら	さ	る	を	体	験	し	た	。	彼	の	自	ら	政	局	の	表	。
面	に	立	つ	て	。	欲	し	。	其	の	理	由	の	一	は	。	或
以	其	の	苦	を	経	験	と	考	へ	た	。	加	爲	の	一	は	。

此	の	一	れ	。	知	れ	ぬ	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。
役	は	子	孫	孫	子	の	所	謂	る	城	攻	め	さ	る	所	あり	。
争	は	士	の	所	あり	と	。	言	ふ	要	語	を	実	行	し	た	。
乃	ち	其	の	力	を	儉	約	し	て	。	決	し	て	無	用	の	方
面	に	浪	費	し	な	か	つ	た	。	彼	の	長	所	は	。	苟	も
作	さ	さ	る	に	あ	つ	た	。	而	し	て	恒	に	其	の	力	を
存	効	た	る	方	面	に	集	中	す	る	を	忘	れ	な	か	つ	た



彼の成功の秘訣は、恐らくは恒久。累
 積、堅持、集注に存し、此の如く、斯
 兵に於ては、伊藤固より彼に及ぶこと
 ない。況んや其他とや。

◇桃李門に満つ

惟ふに維新以来、西郷、大久保と除けは
 彼の如く、門下の人物を輩出せしめたる
 のは、女よ、い。陸軍に固保あり。桂、恩。

玉、寺田の徒以論、清浦、平田、大浦
 。曾、折田の如く、何れも然らず、はたか
 づ、れ、若し其の彼と何人の接觸を保ち
 ず、者々、唇付く手。軍に官僚、軍閥に
 不、所謂、政變者流に、江湖の政客に
 し、学者にも、実業家にも、其他一藝一
 能、此の者にも、少くも、あらう
 彼、何に士を愛し、長閑の暇月と云ふ



も。役の門下の重なる者は、隨處より罷

致した。陸軍の田村怡年造、羽島安正、

如き、官僚の清浄、手田の如き。其の歎

甚た方かすかた、但た不常にして役は、

其の有力者なる門下生を、役に走つて喪

うた。役の政治的衣鉢を相續たす者何人

に。平田清輔は既に老いた。田中義一は

未だ其の望加足らぬ。若し白根喜一は

してあうは。或は役の後継者たるを得た

らあうう。◇悲境たるさすも悲壯

役の死も亭々たる一大老樹也。其の葉は

凋み落す。其の枝は折水掛け。兩打風虐

、号れ直斬千尺。云を刺して、役の

晩年は幸納と云はし、寧ろ悲壯に

あつた。吾人如悲境と云はすし、悲壯

と云ふは、彼が如何に外界の刺戟に

、能く己を堅持して、自らの立場を

最後迄踏みぬいたか、である。

◇薬籠外にも若干ある。

最近三十年、日本のある文武の官僚

、殆ど一人として、彼の薬籠中の初

らざるは、たゞそれだけ。但し重なる除外例と

して、陸軍出身者として、高島鞞之助

。川上操少将、高島は師團長

と、しは、鑛り、その勢力を有してか。

陸軍大臣として、既に多大の功績を呈

露した。川上は、伊藤、藤、内、外

何の勢力を扶植し、山縣に對し、隠然別

何の勢力たるか、は、たか、彼も、野田、調、落

し、去つた。

陸軍以外に、能く、山縣の高の如くある。

さるもの。一は西園寺公望。他は山本権

兵衛丸。後吾兩人。山縣に於ける。所謂

了山法師。鴨河の水。賽の月全栞丸。後

吾は種々の行拙りかき。恒に伊藤と相い

造く丸。西園寺の如きは。伊藤の後継者

と。伊藤かきも擬せらる。自からも

任一二房丸。大隈一丸は。固より山縣と

は。政治上に能くは没交渉であつた。但

丸山縣門下か。桂門下と可なり。桂門下か

大隈門下と可なり。閣僚上。若干の干係

と。晩年に生じた。然も大隈一派を山

縣の葉籠中の物と做すは。餘りに代物か

と。大いであつた。

◇新生の勢力

近年は。直接は山縣の向ふを張る者

は。個人より。は強くと。一人も。可なり。

此も亦に隱心たる一勢力かあつた。そ
 は社会的な勢力た。平たく云へば、民衆の
 勢力た。此の勢力は、五十年間、山縣の
 一生懸命に累積したる勢力に向つて、突、喊
 し来たつた。其の状況も急激の勢、且に向
 ぶ、如く、あつた。此は何人の主張も
 なく、何者の利戟もなく、自由の大地
 であつた。山縣は果して此の新勢力の抬

頭、に、氣か付た乎。吾乎、役程の精鍊せ
 う、此、腕の持主であらば、よもや之も
 看過し、た、は、あるまい。任りに之を痛切
 に自覚し、何かつた、と、するも、眞々的に陪
 示せう、此に相違あるまい。
 ◇ 勢力以上の長生し、た
 定と云へば、役は其の現在の勢力より、も
 長生し、た。役の片日は、勢力で巧く、



寧ろ其力の歴史であつた。彼の力に向
て、直接に挑戦したのには、原敬であつた
。然し之は原敬と云はる。よ、原敬
の竹、表したる。新勢力であつた。而して
其の新勢力は、急轉直下して、形に依り
初も賦し、濠洲に其威力を發揮しつゝ、あ
る。山縣の死するも、死せざるも、其の
其の力の發揮に、是れと相違あるまい

。然もかくしも彼の死に、其の力に
あることを否定するに、は、鈍り、心
事実にある。◇ 眞相なる家康
何れ、この山縣は、長躯瘦骨の一老翁
であつた。然も彼は伊藤の秀吉に肖れよ
りも、家康により鈍く似てゐる。家康は
秀吉の評しれ如く、初禄円満なる大黒天



ひあつた。然も山縣は直言すべし。其の性
なる家康也。然く厚桐と云ふも、其の性
格は、吾人も一に家康を想起せしめずし
て禁じ能はぬ。家康が偉大なる如く、
も偉大なる家康が抱擁力の大き如く。
彼の抱擁力も決して、いかに
人は見掛けによらずぬものか。雅量と大腹
の持主は、伊藤よりも寧ろ山縣であつた。

。彼の袋の口は極の二狭隘なるか如くし
て、其の奥は廣く、且つ深かつた。剛
吐かす。柔も茹^{くら}はすとは、役人の事
に對する要訓であつた。彼は規帳面に
て、極めるところを、
たゞ如き外容にあつた。然もいさな
は、如何なる事でも、
は、行はさるは巧かつた。乃ち

山縣有朋傳記編纂資料(写本) 14

山縣有朋傳記編纂資料(写本) 14



平生苟く作す可からず。其の必要に
一は。大膽に。痛快に。思い切つて断
行した。乃ち平生彼に嫌あきららさる者も。却
て其の鋭り。不謹慎なる。驚く程であ
つた。政治家より。明治。大正の年
代に於て。恐らくは彼を以て。其の第一
とせぬは。たゞの事。

◇中国の律義者

元龜天正の頃には。中国の律義者といふ
字があつた。これは。中国の律義者といふ
義者たる典型を具へてゐた。其の律義者
とは。決して莫逆正直を意味するに
い。地味に。重石に。脚元を足踏の
事も。一歩一歩。踏み堅めを行くの謂
ひ。山縣流の筆法は。一切の思ひ

山縣有朋伝記編纂資料(写本) 14

あつた。彼のには多くの偉人英雄に及ぶか

如き稀気かつかつた。如何なる場合に

。弘くは伊藤に於けるか如き天眞爛漫な

るもの。乃ち出し籠かつた。彼の天下人

心の愛好を撃くには、餘りに用心堅固

であつた。然し彼の周辺に聚る者は、彼

の温情に感激せしむるに己まなかつた。彼

にも相應の人間味があつた。

◇彼の人間味

彼は一介の武弁と云つても、文雅風流

にかけるは、其道々達者と稱せらるる

伊藤の比喩は、和歌の如きは。

弘くは作家の域に於て、詩も決して全

くの素人びは、たつた。江^時往々畫筆に

も宛らね。其の筆翰の如きも、勁健、清

拔、一揮の風骨があつた。餘技は舞、^詠

山縣有朋伝記編纂資料(写本) 14



通才を欲しなかつた。何人も彼に接して
 有る知識の全部を提供せしめた。
 彼は其の接觸する毎に其の所
 在人に何人も追隨も容さなかつた。
 立場に相応する資料を充たすに於ては
 其の精細な文書と関し。恒に彼の
 彼は博覧強記を以て。大隈と争ふ能はさ
 ざも。其の精細な文書と関し。恒に彼の
 知識の追剥

実行以外に別乾坤あるを解した。
 彼は実行家でありつゝも。亦能く
 了嗜欲もあつた。故に懐子の涙もあつ
 ても解した。情恨もあつた。彼は美に對す
 了。鋭風景の如かつた。彼は柳の情水
 心すし。雅人の深致を示さるも。決
 了。特に繁庭の趣味を有した。彼の住宅は
 曲の如くも。造詣する所にあつた。而し

山縣公史實調査會用紙

山縣公史實調査會用紙



還る時には、倭は小なりしもの如く。

唯れ穀と糟のみたるを感せずしては、い

り小なるか、つれ、短く云へば、彼は、精神的

追剥びあつれ、然り掬兒びは、追剥

びあつれ、

大隈は、説法十年、山縣は、徳庫

上平、あつれ、然も、亦れ、微言、冷語、能

く、他の究所を刺し、興に、桑才、小は、吃々

と、一、二、三、の、際、。、理路、整然、。、人、と、一、二、他

の高談、雄弁、より、も、より、大、た、る、感、動、を、与

あ、る、し、の、か、あ、つ、れ、

◇彼の本領

彼は、徹上、徹下、。、皇室、中心、主義、者、に、一、二、

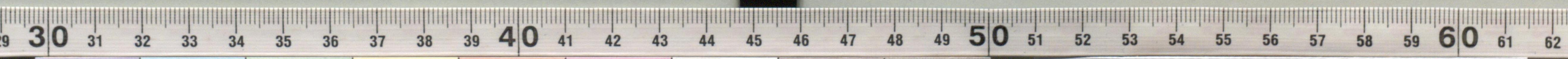
又、れ、穩健、なる、帝國、主義、者、に、あ、つ、れ、。、彼、を

其、一、二、武力、侵略、の、頭、目、と、爲、す、不、如、は、

誤解、も、亦、れ、甚、し、。、彼、は、寧ろ、餘り、に、外、國

山縣公史實調査會用紙

山縣有朋伝記編纂資料(写本) 14



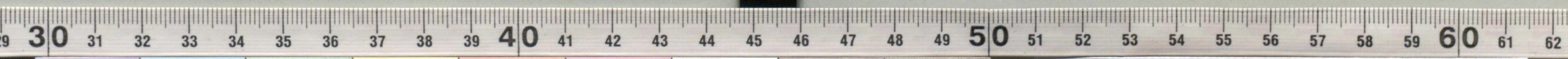
と買ひ被つて片た。彼と雖も全く怖外病
 より蟬蛻する能はたな。孔子は仁者
 は山を愛し、智者は水を愛しむと云ふた
 彼は水も樂くた。彼の住する所。叶す
~~清~~ 涑女の水はたな。若し孔子の
 言葉思ひにすべし。彼は一代の智者であ
 つたとも云ひ得るなり。

◇徹頭徹尾自主自立の人

記者は往年萩に遊む。河内川の辺り。川
 島荘に最島神社を過す。彼の住宅地を
 是舞にた。如何にも蕭條たる部落に、斯
 る場所から彼が如何なる物の産せ人とは
 強くと思ひも寄うぬ心地かした。彼に
 彼は阿地た。彼には富もたなく。彼に
 は特別の縁故もたなく。全く彼の自力で
 其の位置を贏ち得たのた。出ては終り。

山縣公史實調査會用紙

山縣公史實調査會用紙

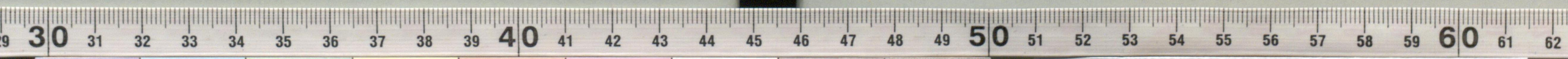


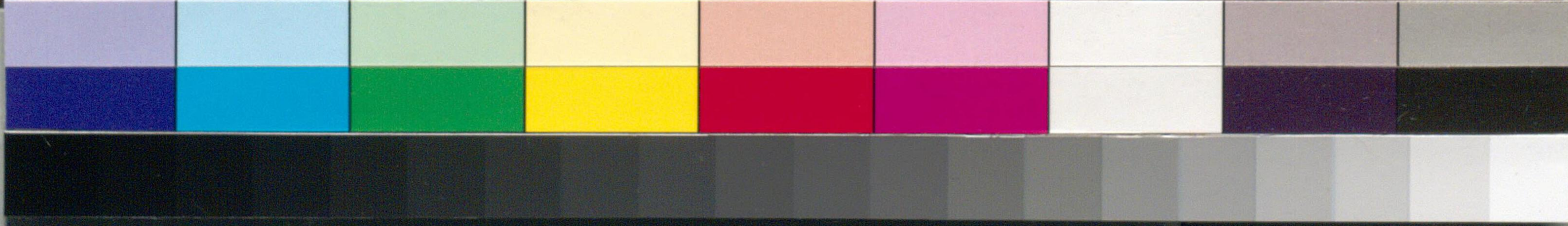
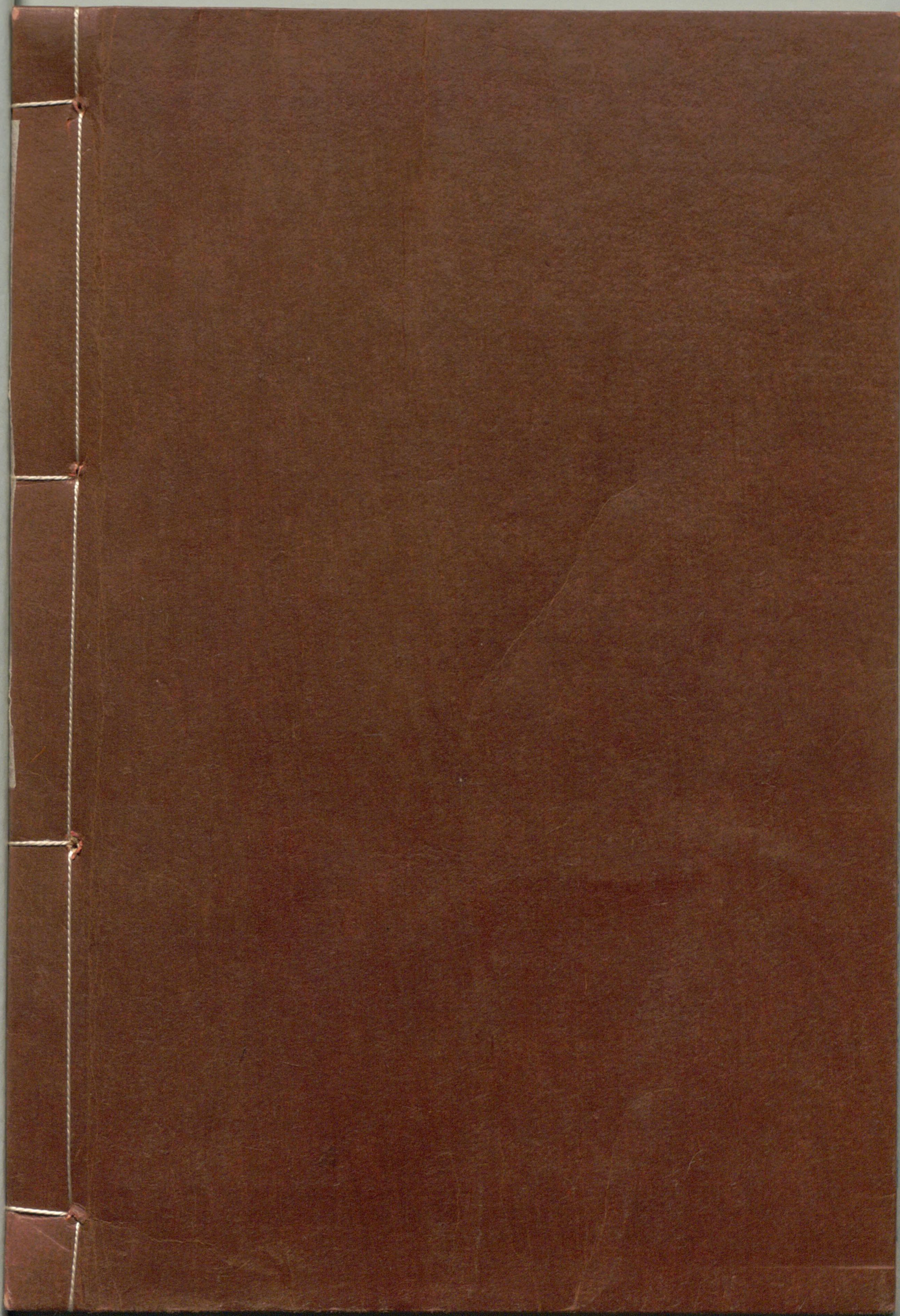
山縣有朋傳記編纂資料(写本) 14

りとは相。乃ち田原に閑居して也。高
は政局の中樞は。彼に在る如き感を倣
さしめ。一人の威望。天下を厭する十教
年。及人々のは。實に古今に比類なき生
涯也。彼の如きは真に自から運命を開拓
したる一人にして。單に己の一事を以て
しとせ。彼は不朽の人物たるに足る。况
んや忠誠君國に奉じ。始終一貫。其の志

を渝へたるに於てをや。後世の歴史家が
彼を見よ。猶ほ吾人が元龜。天正。慶長
。元和の諸雄を見よ。か如くむ。夫かみ。

山縣有朋傳記編纂資料(写本) 14





国立国会図書館 山縣有朋伝記編纂資料(写本) 14